

南三陸・気仙沼を中心とした自然再生活動

いぐね（屋敷林）と地域らしい植物に守られた、豊かな農村風景の再生を目指して

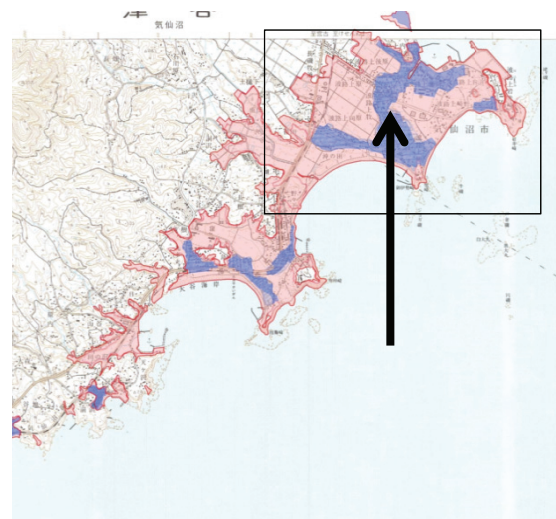
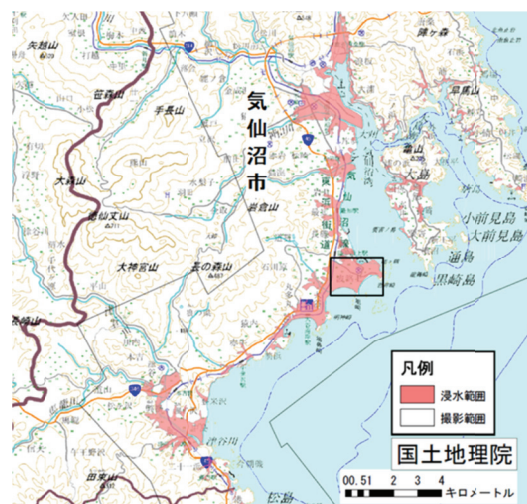
自然再生活動部会／中村華子

山の自然学クラブでは自然再生活動部会を中心に 2011 年から三陸南部地域において自然再生等の活動をしています。2012 年から気仙沼市の「海べの森をつくる植樹祭」の関係者に、植樹祭の準備や種子採取、山取苗の採集、苗木の育成などの活動をさせて頂いたことがきっかけとなり、気仙沼周辺での活動を始めました。富士山森林復元活動などで培った実績が活かせる活動として、楽しく取り組ませて頂いています。

これまで主に、(1)自然観察会を兼ねながら、現地の植生等の調査をする、(2)自然を深く、体系的に知るための観察会（自然学講座、地元学講座）／エクスカージョンを地域のみなさんと一緒に実施する、(3)希少種を含む海岸植物・海岸林の種子等採集活動と苗の育成、を行ってきました。これまでの協働を通じて協力関係のできた地元の特定非営利活動法人・海べの森をつくろう会の担当者やジオパーク協議会の委員、地元高校の教員のみなさんなどと一緒に活動して意識の共有を図り、現地参加者を募集して頂くなどして、地域の環境教育に資するよう活動して参りました。

2014 年からは海岸植物を探しながら、砂浜、磯、海崖といった特徴のある海岸植生を数カ所選んで、住民のみなさんと継続的に一緒に歩き、再生した海岸植物のある場所をマッピングし、代表的な植物種をリストアップしました。典型的な植物や希少種を含む場所を、何カ所か選定して継続的な調査も行っています。もちろん調査だけではなく、許可の取れた箇所では、希少種を含む海岸植物について、種子や実生の採取を行っています。これらの立地は、現在、そして今後も工事等による改変が予定されている場所であり、種子・実生および採取した個体は保育活動を継続し、適宜現地へ戻すことを検討していく予定です。

また、希少種を含む海岸植物の生育地は海べの森をつくろう会地域の団体のみなさんと共有すると共に、気仙沼市役所、宮城県自然保護課、気仙沼市教育委員会等へ随時情報提供をしており、自然公園や海岸林の保全事業等へ役立ててもらおうようにしていきたいと考えています。



図：対象地付近の地図 日本地理学会災害対応本部津波被災マップ作成チーム（2011）2011年3月11日東北地方太平洋沖地震に伴う津波被災マップ2011年完成版から【2万5千分の1・津谷】部分、http://www.ajg.or.jp/disaster/201103_Tohoku-cq.html.

下地図の枠周辺が気仙沼市波路上地区。矢印で示した場所が海べの森をつくろう会第1回植樹地／事務所の場所。当会屋敷林再生活動対象地でもある。

1. 海への森をつくる活動

海への森の植樹祭 海への森をつくろう会さんが主催する植樹祭はイオンを始め様々な方々が支援してこれまで5回以上開催されてきました。2017年4月には気仙沼大島で「復興ゆず植樹」を（右写真：海への森をつくろう会撮影）、さらに2018年は3月に気仙沼大島で浦の浜ターミナルでの植樹祭が予定されています。



2. 種子採取～苗の育成から屋敷林の再生活動へ

種苗の採取・苗の育成 植樹・自然再生のための苗木の育成に協力しています。海への森をつくろう会さんが活動を始められた頃から種子の採取、苗の育成に協力させて頂いています。現地スタッフ・参加者のみなさんともできるだけ一緒に、種子採取、種子の調整、播種などを実践してきました。毎年採取した種子から苗を作って、近隣での植栽に活用して頂いています。2017年も10月の種子採取には東京農業大学の治山・緑化学研究室にご協力いただきました。毎年、海岸から山地まで、自生の母樹がある数カ所で種子を採取しています。種子は調整の後、発芽、育苗して、内陸の二次林を目標にする場所／海岸に近いところなど、場所にに応じて使い分けながら植栽する予定です。



2017年10月、唐桑半島御崎／徳仙丈周辺での種子採取。農大生のみなさんとの作業。

屋敷林（いぐね）再生活動 海への森をつくろう会さんの活動地のひとつ、第1回の植樹祭を行った場所を、屋敷林として再生させていただくための協定を締結し、屋敷林再生活動を行っています。初期植栽を終えた段階の土地において、目標植生に向かって更新活動を行うこととしました。二次植生としての屋敷林の完成に向け遷移を確実に進めるためには適切な目標植生の設定、適応的な管理、長い視点での取り組みが必要だと考えられます。年間を通じて、春季・植樹／夏季・草刈り／秋季・種子採取 など、季節や現地事情に合わせた適応的な活動を行なうとともに、周辺に残る自然の森や立地環境を学ぶための観察会などを行って参ります。



採取した種子。ヒサカキ、ガマズミ、シラキ、カエデ類など。農大の圃場で育成中の苗（下）。

屋敷林・居久根（いぐね）について、役割やあり方を検討しなおし、現代の環境や生活にあわせた、新しい農村風景の1つの要素として市民みなさんが活用し、協力しあって守っていくことができないか、検討していきたいと考えています。



2017年、カシワの苗を現地へ戻した（下2枚）。カシワを採取した場所は2017年に工事で母樹がなくなった。



3. 海岸植物の保護と海岸林の保全・育成

海岸植物の保全・再生 三陸らしい海への風景を取り戻すためには、海岸植物を保全し、再生することも大切です。地域の植物を大切に守る取り組みとして、貴重な海岸植物を保全し、採取・育成する事業をとまに行います。三陸海岸は津波の被災後減少、もしくは消失した植物や、分布の南限・北限地とされる植物、希少種等も多くある地域です。工事などによって直接個体・群落が消滅することだけではなく、生育地の分断や縮小の影響も大きいと考えられます。推移を観察し続け、再生する群落に注目する、生育地が改変される際は採集、移植をするなど、適応的な取り組みを行いたいと考えています。

4. 体験型学習と果樹・園芸による地域活性化

海への森をつくろう会さんと近隣住民のみなさんは「自然と共に歩む生活を取り戻すため、森を再生しながら地域活性化のための活動をする」という活動趣旨で熱心に活動されています。昨年の会報で、「私たちがお手伝いできることとしては、より地域性を重視した視点がどのようにウリになるのか、お伝えすることかなと思っています。」と書きました。2016年からは蕎麦は市内・八瀬地区の農園から種を分けて頂く、菜種は大東町のデクノボンズさんに在来品種のキザキノナタネの種子を分けて頂くなどの手配を少しお手伝いさせて頂きました。2017年には会員のみなさんがワサビ、蕨などの山菜、果物を使ったジャムなどを作り始めました。海と山の恵みが一緒に楽しめる環境が羨ましいです。今後も楽しみです。“まていにすすむ”活動、継続中です(別稿「まていに。」ご参照下さい)。

2017年の自然再生活動

5月。工房地あぶら(デクノボンズ)さんから2016年に種子を頂いた、在来の菜の花(キザキノナタネ)が海への森をつくろう会の活動地に咲きました!大きくて少し色が淡い、きれいな花が咲きました。

菜の花が咲くと青い海を背景にたいへん美しい風景になりますので、一面に広がる菜の花畑が近くにあるといいなと思っています。少しずつ美しい景色を作り出していくことができればと考えています。そして2017年9月には、もう少し量を増やして種子を譲って頂き、「在来菜の花品種・キザキノナタネの種まき!」を実施しました。来春が楽しみです!



2017年1月 工事の始まった岩井崎の海岸。



活動地に咲くキザキノナタネの花(菜の花)



活動地でのキザキノナタネの種まき(9月)

6月。ハマナデシコの植栽。

知人たちが中心となって、<復旧工事により消失する東北の海浜植物群落から、今ある海浜植物の種子を集めて、北海道で育苗し、再び現地の適地あるいは近隣小学校等に移植すること>を目的として立ち上げた「北の里浜 花のかけはしネットワーク(通称:はまひるがおネット)」という団体があります。仙台から釜石まで、広く活動をしています。様々な情報交換をしてきましたが、ふとしたことから気仙沼の小泉地区でハマナデシコを探しているとの話を聞きました。小泉小学校の校歌の歌詞に「なでしこ」が歌われているのだそうです。

折良く？2015年に岩井崎付近の海岸で再生した個体を見つけ、海べの森をつくろう会さんと一緒に採取した種子から育てた苗がたくさん育っていました。その一部を6月28日に小泉小学校のみなさんに植栽して頂くことができました。ちょうど植栽適期でもあったので、6月上旬の活動の際には、活動地にもみんなで植栽をしました。ちなみに、「歌詞のなでしこはカララナデシコとハマナデシコのどちらなのでしょう？」と聞かれました。小学校創立の頃は現在の所在地ではなく、海岸近くにあったことを知っていましたので、「どちらも近くに生えていたはずなので、どちらもアリですね」とお返事をしました。お花が咲いてくれたらいいね、咲いたら夏になでしこ祭り、お花見でもしよう！と話して6月は帰京しました。

7月。植栽して2週間ほどで現地から電話が。

「ハマナデシコが咲きました！」とのこと。話はとんとんと進み、地域のみなさんと一緒に復活を祝って8月に「なでしこ祭り」をやることになりました！自治会のみなさん、商工会のみなさんも協力して下さい、8月にお祭りが開催されました。当日はお天気が悪くて屋外での行事があまりできなかったのですが、地元のみなさんから、“郷土のお花を見つけ、咲かせてくれてありがとう”とおっしゃって頂きました。心にある風景を取り戻すことの大切さが心に沁みだ一日となりました。

9月。「ハナマスの植樹」

活動を始めたばかりの2012年の秋、旭崎の周辺でハマナスの実を採取しました。量は少しだけでしたが、当時は周りに残った海岸植物はほとんどなく、貴重な個体でした。ハマナスの種子は休眠性が強く、普通に播いてもあまり発芽してくれないので、日頃、研究活動などでお世話になっている雪印種苗さんにお渡ししてあったのでした。海岸植物は発芽処理が必要な種が多いため、専門知識の豊富な会社のみなさんに活動当初からいろいろ相談をさせて頂いております。雪印は北海道が拠点、寒冷地に育つ在来の植物に関する知識や経験が豊かな、頼れるタネ屋さんです。2012年に採取したそのときの種子を圃場でいねいに育ててくださっていました。

今年の活動で植栽させていただこう、という話になり、9月に一部を北海道から送って頂き、活動地へ植栽させて頂きました。



小泉小学校での植えつけ作業（海べの森をつくろう会撮影）



上：小泉小学校 下：海べの森をつくろう会事務所前



ハマナス苗の植栽（9月）



活動はこれからが本番。

三陸ではいまだ仮設住宅も残り、これから復旧工事が始まるところも、道路が通るところも、新しく施設ができるところもたくさんあります。地域由来の植物を確保し、育て、活用できる場面ができてくるのはこれからです。ですが、復興対象期間が終わると途端に先細ってってしまう事業や活動が多いことも現実です。また、そのようなことに手間や時間をかけて取り組む意識をどのくらい共有できるのか、どうかはわかりません。当会のメンバーや仲間は自然や地域に思い入れのある方が多く集っていらっしやいます。大学の同窓生や研究仲間も力になって下さいます。

仲間と共に、活動を通じて、これからも地域にあった自然の再生、地域資源の活用をお手伝いしていきたいと思ひます。私たちが協力させて頂けることは多くはありませんが、できるだけ長く、楽しく、有意義で適応的な活動を続けていきたいと思ひます。

ハマナデシコ 再生順調



「海への森をつくらう会」の畑に咲くハマナデシコの花。開花のピークは過ぎたが、晩秋まで少しづつ見られる

協力に感謝きよう祭り

秋には多くの種を育てるハマナデシコのある市町村の合同事務所開設。その再生を目指す気持で、波路上地区の「海への森をつくらう会」は、地元で育てられた種を、復興に向け共に頑張る仲間と共に育てる。今後の活動の種を育て、仲間を育てる。紅葉色のきれいな花を咲かせ、

海への森をつくらう会
は、自然の再生活動が
なされる中、種を育て
るために地元で自然観察会
を開いている。
被災した波路上地区へ
の種を育てるため、種を
育てる中、種を育てる
ために地元で自然観察会
を開いている。
被災した波路上地区へ
の種を育てるため、種を
育てる中、種を育てる
ために地元で自然観察会
を開いている。

秋には多くの種を育てるハマナデシコのある市町村の合同事務所開設。その再生を目指す気持で、波路上地区の「海への森をつくらう会」は、地元で育てられた種を、復興に向け共に頑張る仲間と共に育てる。今後の活動の種を育て、仲間を育てる。紅葉色のきれいな花を咲かせ、

河北新報地域版「リアスの風」8月19日

ハマナデシコ植栽 校歌と共に未来へ

小泉小

気仙沼市小泉小(田口綾子校長、児童57人)は6月28日、校歌の歌詞にあるナシコ(一種ハマナデシコ)を全校児童で校庭に植えた。植栽は被災地の海浜植物を守る活動をする「北の里浜、花のかけはしネットワール」(札幌市)と「海への森をつくらう会」(気仙沼市)の2団体が協力した。ハマナデシコは東日本大震災の津波や防災工事の影響で、現在の姿を見つづけるのは難しく、今後地域にも殖やしていく。

美しい郷土の自然再生



ハマナデシコの苗を校庭の花壇に植える児童

「海への森をつくらう会」の畑に咲くハマナデシコの花。開花のピークは過ぎたが、晩秋まで少しづつ見られる

「ナシコ」の歌詞がある校歌
1番を合唱した。
田口校長が「古里に元々咲いていた花を殖やして、未来に向けて美しい小泉にしよう」と児童に呼び掛けた。児童らは校舎前と鉄棒付近の花壇、校車駐車場脇に両団体の指導を受け1本ずつ丁寧に植えた。
作業の後、児童を代表し6年生の芳賀華音さん(11)が「苗を植えて校歌の歌詞の風景を思い浮かべることができた。花が咲き茂るころ、また校歌を歌いながら小泉の良さを感ずりたい」とお礼を述べた。
苗の元になったハマナデシコは、海への森をつくらう会が2015年度に県の委託を受け実施した気仙沼市内の沿岸植物保護保全対策業務で見つけた。活動に協力した東京のNPO法人「山の自然クラブ」副理事長の中村華子さんが波路上地区に自生するハマナデシコを発見。種を採って市内の育成施設で増殖を進めた。
中村さんが今春、花のかけはし

シネットワールが小泉小に植栽したい、探したがなかなか見つからずハマナデシコを探しているなかつたと言ひ、4年越しのこころを知り、今回の植栽につながった。
母親が小泉出身という、同じく「海への森をつくらう会」の代表者は「ハマナデシコは数十年前まで順調に殖え、波路上地区でも植栽を進める。4年前に被災地支援活動で小泉小に来校し、校歌を知った同ネットワークの鈴木玲代表は「歌詞にあるナシコの苗をいづか子どもたちと植えたい」と思